

潮 流

1 円と1セント

取締役調査第二部長 新谷 弘人

4月からの消費税率引上げにともない、JR東日本管内では『二つの運賃、「IC運賃」と「きっぷ・定期券の運賃」ができます』との広報が目につくようになった。税率の引上げ分を1円単位で運賃に反映させたIC運賃を導入し、かつ首都圏の中心部（電車特定区間・山手線内）に限り、IC運賃はきっぷの運賃と同額または安く設定したのである。これにより、券売機で通常現金で買う税率引上げ分を10円単位で反映させたきっぷの運賃に加え、首都圏中心部のきっぷより安いIC運賃、その他のきっぷより安い場合も高い場合もあるIC運賃、と3パターンの価格による複雑な運賃システムが誕生することとなった。

昨春JR東日本等のこうした方針が報道されたときの第一印象は、きっぷの値段の四捨五入も許さないほど利用者の「デフレマインド」が強いとの懸念が、寡占的で競争環境が比較的優位にある鉄道事業者にまで染み渡っているのか？といったものであった。10月の国土交通省の文書にも「ICカード運賃の方が現金運賃より安くて然るべきという消費者感覚を前提に」との記載がある。わからなくはないが、何か早期のデフレ脱却をめざすアベノミクスにそぐわないニュアンスのような気がする。

一方、消費税率引上げに備え1月から1円玉の製造が再開された。2008年度以来とのことである。14年度と合わせ1億8600枚程度製造するということだが、現在の流通量389億枚に対して0.5%程度であるので、万一不足した場合のための単なるポーズなのかもしれないが、コストをかけた真面目な話である。

海外の少額貨幣の動向はどうか。実は、カナダ・オーストラリア・ニュージーランドなどですでに1セント硬貨は廃止されている。またユーロ圏や米国にも廃止の議論があるようだ。理由は単純で、発行コストが高いためである。ただこれらの国でも1セントという流通単位がなくなったわけでない。たとえばカナダでは5セント硬貨は存在するので、現金の場合2捨3入・7捨8入で5セント刻みの受渡しを行っている。クレジットカードなど現金以外での支払いでは従来どおり1セント単位の受渡しである。

少額貨幣における彼我の対応の違いが、「インフレマインド・デフレマインド」で説明できると主張するつもりは全くないが、次回想定される15年10月の消費税増税への対応については、デフレ脱却を意識でき、（便乗値上げは論外としても、）わかりやすく価格転嫁できる環境になっているか、が注目される。いずれにしても、4月以降、個人消費を中心とした駆け込みの反動減と回復の動き、従来の回復時とは異なる輸出入の動き等、増税後の日本経済の動向把握に全力を挙げて取組み、ご報告していきたい。